Merry merry!!

koyukichi

We

～♪We wish you a Merry Christmas,
We wish you a Merry Christmas,
We wish you a Merry Christmas,
And a Happy New Year.

よい知らせを持って来ましたよ、
あなたと、家族に、クリスマスおめでとう、

そして、

wish

　賑やかな一日が終わりを迎えようとしていた。
　明後日には夢のように消えるはずの、その白い付け髭の似合わない客引きたちが街をまだらに赤く染めていた。老人の格好をしているその若者たちは、今日また一層増えている。
　そのバイト達の気苦労も知らない子供たちは、彼らを見て大いにはしゃぎ、そしてその親達もまた子供の笑顔を見て各々誰よりも幸福そうな顔を見せた。

　例年通りのその暖かな一日。
　午後からしんしんと降り積もる雪が、イルミネーションの灯りを受けて色とりどりのグラデーションを魅せ、その幸せな人々を祝福した。

　しん、

　街の喧騒もなんのその、ほんの少し郊外に離れるだけでその暖灯は仄かに遠くなる。
　それは、まるで雪越しに一枚ヴェールの掛かったような世界だ。もっと言えば、スクリーン越しの恋愛映画の世界だろうか。クリスマスという一行事が持つ暖かさや幸福感、そういったものとの距離感はそれら２つとどこか似ているような気がした。

　とある真っ白な建物の３階、そのとある真っ白な一室は、
　いつもそのヴェールの外側であり、そして常にスクリーンの外側にあった。

　布団に潜ったまま、ため息をひとつ。
　もぞもぞと顔を出しようやくまぶたを開く。大して眠くはなかった。
　日中、ここの幼い子供たちはクリスマス会で散々はしゃいた。そしてこの少女もそんな年齢でもないというのに、珍しくちょっとだけ幸福感の煽りを受け、束の間の楽しい気分を味わった。
　そして現在、その日中のふわふわとした感覚が抜けず目がギンギンに冴えてしまっているのだ。

　……眠る努力も馬鹿馬鹿しいような気がしてきた。

　どうせあと４時間もすればまた起きるのだ。
　そしてはしゃぐ年の離れた無邪気な弟妹分たちと一緒に、あのクリスマスツリーの根元に恐らく置かれているであろうプレゼントを見て、私も空気にあわせて嬉しげにリアクションを取らなくては。そしてひとしきり彼らが満足した所で、皆でそれらを片付け、今度は注連縄を片手に正月飾りを施さねばならない。

……誰のためのクリスマスなのだろう。
それは馬鹿馬鹿しい問答だった。それはこの場所で過ごしている子供たちのためだ。
……しかし、一人だけ年の離れた彼女は距離を感じていた。
自分だけサンタの正体はおろか、クリスマスにおける世間の商売戦略的なカラクリも当然知ってしまっているわけで、彼らに混ざって純粋に楽しむにはいかんせん無理があった。
だってここには煙突なんてないのだから、サンタがどこから来たかなんて考えるまでもない。与えてくれる人というのは、常に内側にいるのだ。

……こんなに気を使うくらいなら、わたし別にプレゼントがなくったって構わないのに。

まぁここの職員もそんなことをするわけにいかないから、こうなっているわけなのだが。
憂鬱な明日を考えることは、もう止めようと思った。
視界に映る、その見慣れた冷たい真っ白な天井を眺めることにも飽き、１５、６と思しき少女は寝転がったまま大きく伸びをした。

ふと身を捩ると置き時計が丑三つ時を示していた。
お化けや幽霊の類が苦手な少女は、その微妙な時間帯に一瞬だけ顔を顰めた。
日中は皆でTVニュースを見たりクリスマス会ではしゃいだりと、あんなに明るい時間だったというのに、何故同じ３時でも夜はこうも不気味になるのか。
それもまた愚問だった。
この真っ白で人気のない特殊な空間が、静かでどこか涼し気な空気なのはずっと昔からだ。
また眠りなおす気にもなれず、トイレにでも行こうか、などと思ったときだった。

コッ、

反射的に窓を見た。
……なに、なになになに、なんなの。

怯えはしたものの、自らの目で確かめる勇気などなかった。
風だ、風、木の枝でも当たったのだろう、と心の中で言い聞かし、ナースコールのボタンに手を伸ばしかけていた自分を戒め、頭まで布団に潜る。
……こんなことで怖いだなんて、子供じゃあるまいし！
だいたい一度物音がしたくらいでこんな、そうよ子供じゃあるまいし！

…カツ、
コッ、コツ。

少女はようやく震え上がった。
明確な意思を持って、だがしかし注意深く加減されて叩かれる窓に、恐る恐る身を起こしゆっくりを見やった。その時その僅かな振動で少しずつズレていた内鍵が落ち、目の前で窓は開け放たれた。
月明かりに背を向けた影が、起きていたこちらにようやく気が付いた。
窓枠に足を掛けた格好で男は固まり、そして少女はそのバカバカしい様相を見て固まった。
しかし男は淀みない笑みを浮かべ、慣れた様子で右手を上げた。

「メリークリスマース！」

「……やっぱり怪しいからナースコール押そう」「やめろやめろやめてください！！」
男は慌てて窓枠から部屋へ飛び降りた。
ふ、と左足が不自然に揺らぎ、ベッドから繋がっていたそのボタンを少女から引ったくった。あまりの慌てっぷりにちょっとだけ笑えた。それを機に冷静な気持ちが少しずつ戻ってきて、恐怖心は消えた。

「……見たことないけど、おじさん病院の人なの？ あ、わかったバイトの人じゃない？ 知ってる人がサンタだったら皆の夢壊すもんね？」
男は一瞬黙ってこちらを見直し、
「……捻くれたガキだな。どう見たって俺は完璧にサンタさんだろうほら、というかおっさんとか言うなまだ若いだろうが」
……と、そのコスプレに似合わぬ言葉遣いで言った。
確かに、その男はまだ２５．６と思しき人間で、サンタのコスプレをしていた。

「そうか、今年はこう来たかー。部屋に回って配っているんだね？」
男は一瞬固まったが、「まぁそんな感じだな」と頷いた。
恐らく病院の計らいというヤツであろう。
例年と違い、今年は枕元にでもプレゼントを置こうと思ったのかもしれない。と、鼻がむずむずし くしゅんとクシャミをすると、男は悪いと言いながら窓を閉めた。
バイトならもっとちゃんとしたヤツを雇えばいいのに、と内心思いつつさっさと手を伸ばすと、男は目を丸くした。

「……あ？ なに？」
「なにってプレゼント、くれるんでしょう？」
背負ったその白い袋を指さした。
「……可愛げのねぇガキだなー、サンタは良い子にあげるんだぜ？」

「御託はいいよ、そんなの信じる年でもないんだよね」
　早く回らないと皆が起きる時間になっちゃうよー？ と、こちらが述べると、「起きられるのは困るな」と言いながら、ポケットからガムテープを取り出しいきなり両手を掴むと、見る間にグルグルと封じられた。

　一瞬、意味がわからなかった。

「……ちょ、え、なにこれ、え！？」
「しっかしちょろいな？ 知らないヤツを信用するとかさすがガキって感じ？」
　ケロリと告げたそのさまに、何を言っているのだと 思った。
「病院のヤツなら、窓から来なくても鍵使って入ればいいと思わないか？」
　だいたい俺はプレゼントなんて持ってねぇし、と言うなり背負っていた袋の中身をこちらに開いてみせた。確かに中身は空っぽだった。

　ふと首を捻る。
「……ちょっと待って、配らないのにじゃあなんでここに入って……」
　それじゃあ意味ないじゃん、と言いながら日中に見たTVニュースを思い出した。
　頭の中でニュースキャスターの言葉がリピートする。

『気持ちが浮かれる祭日は戸締りにご注意を。
　住居に侵入し貴金属などの貴重品、そして子供たちへの高価なプレゼントなどを、』

　ちょっと待って、巷で噂の、これ、うそ。

　思い至ったこちらを見、サンタの格好をしたその男はようやく哂った。
「……改めまして。こんばんは、運のない可哀想なガキンチョ。偽物のサンタさんでぇす」

　コイツ、泥棒だ。

　手際よく両足首もぐるぐるとガムテープを巻かれ、すまきにされてしまった。
　どうせ誰も気づきやしない、と口にはガムテープはしなかった。むしろ喚くこちらを面白がっているような感じすらした。身動きがとれない。

「……ちょ、ちょっと！ せめてトイレ行ってからにしてよ、わたしこれからトイレ行こうと思ってたのに！」
　にこやかな笑顔で返った。
「漏らしたって看護して貰えるだろ、ここ病院なんだから。せいぜい我慢しろ」
……と、ケラケラ笑って手を振って去りかけた。

　……ムカツク。思わずその赤い背に吠えた。

「……身長173ないし174センチ、体重60キロ以下、年は恐らく26！」
　男は振り向いた。顔には余裕が浮かんでいた。
「中肉中背の男なんざゴマンといるさ、年末年始は物取りも多いし捕えられっこねぇ」
　警察も一件一件時間掛けて調べたりできねぇの、と言った。

「……お酒は付き合いで呑む程度、タバコは一切吸わない嫌煙家。両利きだけど矯正か何かしたあとで、元は左利きだったんじゃない？ あと左足首かな、２ヶ月以内に軽く捻ったでしょ？ ちょっと変な癖が残ってる」

　どうよ？ と首を捻って見やったが、返事を聞くまでもなかった。その眉間にはやや険が寄っており、自身の推量が当たっていることがわかった。ようやく胸がスッとした。
「…当たってる？ わたし初対面の人の観察が趣味なの。吐く息でお酒とタバコはわかるし、これでも似顔絵なんかも得意なんだよ。 ……警察が来たら、歩き方の癖から話し方の癖まで全部喋って絶対捕まえてもらうから」
　暫くこちらを見つめていたが小さく溜め息を吐き、どうでもよさそうな顔をした。

「……で？ 」

　……は？
　こちらを見て、嘲笑った。
「そんなことペラペラ俺に喋って、お前は自分を不利にしてどうすんだ？ お前は両手両足動けない、俺は動ける。そんなやっかいなガキなんだったら、殺した方が早いって思うかもしれねぇ

よな？」

　息を呑んだ。
　その様子を見て満足したのか、男はようやく普通に笑った。
「……窃盗に来て殺しなんて割に合わねぇことはしねーよ。今のは物の例えだ。ガキならガキらしく大人しくしてりゃいい」
　言うなりさっさとベット脇の引き出しを開けた。
「あ！ ちょっと！！勝手に開けないでよだめだってば！！」
　真っ赤になって言い募るこちらを気にせず、手袋をしたままごそごそと覗いている。
「おいおい、なんだよパンツばっかじゃん。金目のモンはねーのかよー」
　ひょいと目の前に投げて寄越されたのは、自身の下着の替えであった。

　……勘弁してよぉ。

　これでも年頃の娘っ子である。
　急速に勢いが失せ、姿を見ていられなくなり身を捩って枕に突っ伏した。
　その間にも男はベッドの下やらなんやら、大雑把に調べあげ、５分と経たぬ内に目ぼしい物がないとわかったのか、その場で思い切り伸びをした。
「着替え以外なんもねぇのな、親から金とか貰ってねーの？」
「……買い物は親がして持って来てくれるからお金なんて持ってない」
　そうか、じゃあな、と述べさっさと部屋を出かけた。
「……許さないから許さないから、パンツ……ひどい」

　やっぱりクリスマスなんて大嫌い、と呟くと、男は振り返った。
「……タダで欲しいモン貰えんだから、お前らの年齢が一番楽しいと思うけど？」
「……楽しいわけないじゃん。サンタなんていないってわかってるし、プレゼントだって誰かが用意した物だってわかってるのに。……他の小さい子の手前そんなこと言えないし、気を遣ってばっかで何が楽しいの」
　おまけに今日はこんな有様である。
　泥棒と会ってガムテープで両手両足を縛られるなんて、この上ない不幸に違いなかった。

「……ひとつ言っておくぞ、糞ガキ」
　返事はしなかった。男もそんなものは望んでいなかったのか、気にせず続けた。

「親や大人が周りにいて、たからずに物貰えるっつーのはな。すんごく有難い事だぞ」
「……、泥棒にお説教なんてされたくない」
　それもそうだな、と男は応え、今度はさっさと部屋を出ていった。

　その去ってゆく赤い後ろ姿を、酷く恨みがましい気持ちで見ていた。本当に本当に、そんな物は心からクソ食らえだった。

　大人のその『お前たち子供のことはなんでもわかっているんだ』という口調が大嫌いだった。わかるもんか、と思う。病院でクリスマスを過ごす人間の気持ちなんてわかるわけない。親しい友人にも会えず、親とケーキが食べられるわけでもなく、ただ明日を迎える者の気持ちなど。
　TVに映る、日に日に騒がしく浮かれてゆく世間と、それに反比例して何故か憂鬱になってゆく気持ち。日に日に実感せざるをえない、世間や周囲とのこの温度差を。
　……きっと、ヴェールの向こう側にいる人は感じたことなどないのだろうと思った。

　ならば、段々と開いてゆく温度差、その怖さを、わかってもらえるわけがなかった。

　最初から制限時間を決めていたのか、男はさほど時間を掛けず帰ってきた。
　空っぽだったはずの白い袋は何を詰め込んだのか不自然に膨らみ、男は出会った時と違い満足気な顔をしていた。

　ほら。わたしにはもう、その楽しげな感覚がわからない。

　上機嫌な男に気まぐれに声をかけてみる。
「……なにを盗ったの？」
「あ？ 訊いてどうすんだよそんなの」
　別に、ただ縛られただけってのも つまんないんだもん、と返すと、男は普通に窓に腰掛けて口を開いた。

「薬品だよ、それなりに金になるんだ」
　ふぅん、と返した。訊いてはみたものの、あまり興味はなかった。よくは知らないが、薬局で扱えないような物があるからなのかな、と思う。つまらないなと思った。

「……ねーねー、サンタさーん」
　訝しげな顔で、まだなんかあんのかよ、と返った。
　両手を差し出して、言った。
「これ、痛いから外して？」
　面倒くさそうな顔をしたので、思ったことをそのまま続けた。
「別に何かする気もないよ。私の体力じゃ捕まえられないし、コレが邪魔なだけ」
「……計画っつーのはな、変に情をやるから解れて破綻すんだよ」
　だからそれは外さない。明日誰かが来るまで待ってな、と言った。それもそうか、という気がした。

「じゃあ、彼氏ください。一人でクリスマスさみしい」

　視界の先で男は吹いた。
「アホー！ 今からじゃ間に合うもんも間に合わねぇよ。んなもん自分で見繕ってこい」
「えー。サンタとかいうからには何かさー、偽物でも不思議な力を持ってしてさー」
　　至極面倒くさそうな顔をして、言った。

「そんなもん、来年まで時間あんだしこれから作りゃいいだろうが」

　心が冷えた。
　固まったこちらに気が付き怪訝な顔をした相手に、胸の奥がぐらぐらした。
「……来年のクリスマスなんて来ないよ」
　は？と言った。
　きっとこの人は、脳裏にソレが霞むことがないくらい、どこにでもいる、健康な。
「ここ、どこだと思ってるの？ 病院だよ？」
　あぁ、やっぱり孤独だ。

「来年の今頃には生きてる保証なんてないもん」
　……今年が最後かもしれない人なんていっぱいいるんだよ、と言うと空気も冷えた。
　無言の時間が永遠に感じられたが、男は静かに、そうかとだけ言った。それを少しだけ意外に思った。

　告げるたび、何も知らなかった誰かさんたちは俯いて謝るのが常だった。
　ごめんね、そうだとは知らなくて。
　ごめんね、何もしてあげられなくて。
　ごめんね、勝手なことばかり言って。

　これと言って盛り上がりもなく終わりゆく、この空っぽな自分の人生そのものより、投薬の副作用で髪が抜けてゆくことより、時折襲われる気が狂いそうな体の痛みより、この回復の兆しのない寂しく孤独なだけの闘病生活よりもずっとずっと、その無数の『ごめんね』に篭った、ヴェールの向こうの哀れみが大嫌いだった。

　そう言う人たちは、下手をしたら涙まで流すのだ。
　少女はそれらの言葉はおろか、その自分のために流されたと思しき涙も大嫌いだった。
　哀れみなど、所詮他人ごとだから言えるのだ。明日が確実だから、可哀想だと言えるのだ。その事実を当然のものとして受け入れるしかなく、ただ毎日を過ごす私たちとは、違う。

　ああいった言葉を告げられるたび　『私たちと君たちは違うのだ』と言われているような気がするのだ。

　男はふと歩いてきてベッドの脇に腰を掛けると、ぼんやりと見上げたこちらの頬をいきなりつまんだ。痛い。目を瞠る。
「……俺はプレゼントなんて持ってねぇの」
「へぇ、……可哀想ぶって何とか捻り出してくれるかと思ったんだけどな」
　サンタは思ったよりケチなんだぁ、と自分からクスクスと笑いが漏れた。それを見つめ、男は

仏頂面のまま言った。
「自分で探せ、そんなもん。意地でも自分で探し出せ」

「……別にいいや、もう。本気で言ったわけじゃないし。あ！ じゃあ代わりになにか面白い話して」
　はぁ？と返るが気にしない。
「だって不法侵入者に気がついて目が覚めちゃったんだもの。ちょっと眠くなるまで何か話してくれたっていいじゃない、偽物でもサンタなんでしょう？ 当直の人が回ってくる時間までまだ時間もあるし、ほら」
　実際はこの男が来る前にはとうに冴えていたわけだが、よくよく考えたら泥棒に会う機会などそうそうないに決まっていた。
　何か珍しい話を聞きたかった。

marry

　ずーっとずっと前かずーっとずっと未来の、とりあえず今ではなくそしてここではない、どこかに住む平々凡々な男の話だと泥棒は言った。

「……で、男は普通に義務教育を終えて、そして普通に受験して近所の高校に通って、そしてまた普通の大学に進学した」
「……うん」
　泥棒は話が下手だった。『話して聴かせる』という概念がないのかもしれない。誰かの関心を引く話し方というものを全く知らない印象を受けた。
　ベッドの脇に座り、窓の外に降る雪を見やりながら、どこまでもつまらなさそうに紡ぐ。
「んで男がどこにでもいる大学生だったある日な。……中流家庭だった男の実家が、何故か急に破産するんだ」
　おまけに急展開すぎる。
「へ？ なんで急に」
「その男の親父はお人好しな上に、疑うことを知らない人間でなぁ。古い友人だとかいう男の、保証人になっちまってたんだよ。……で、ありがちな話なんだが、そいつは払えなくなってさっさと逃げちまって、親父は借金ウン千万を背負う羽目になってんなもん払えるわけがねーから」

　自己破産になったわけだ、と続いた。
　……ふぅん、と返す。借金云々、確かにTVドラマでもよく耳にする、よくある話だった。
「それで、男は大学をやめてな。とりあえず金になる仕事を探すわけだ。とはいえ不況だから碌なのがなくってな。家族みんなが路頭に迷っちまってるわけだから、もう手段なんて選んでられねぇ。当たり屋みたいなことやったり、適当に引ったくりしながら親に仕送りをすんだよ」

　無茶苦茶だと思った。
　なにより話の内容が雑だと思った。だってその筋では破綻するのが目に見えているのだから。
「……でもそんなの続かないじゃん、すぐに捕まっちゃうよ」
　泥棒は話の腰を折った少女を怒りもせず、やっぱりそう思うよなぁと頷いた。

「実際、男はすぐにバレて警察に捕まったんだよ。でもな、そいつは内心捕まったことに安堵してたんだ。親譲りで馬鹿正直だから、自分が生真面目な道から逸れていることには気がついてた。
　……だから、その時『これでようやくやめられる』なんて思った」

　犯罪者の心理など考えたことがなかった。不思議な心地がした。

「……で、何件も何件も引ったくってたから、ちょっとしたニュースになったりな。ついに、男が引ったくった金で仕送りをしていたことが、その親にバレちまうんだよなぁ、」
「…だ、だめじゃんそれじゃ、」
「そうだな、だめだな」
　けろりと言った。
「……で、男の親父とお袋ってのは、そりゃもう真面目一筋みたいな人だったから。世間に顔向けできないだの、馬鹿息子だのと嘆いて嘆いて。……でもまぁ、そもそもは親父が破産したのが原因だと二人は思ってさ」

　言葉が止まった。
　見上げると、泥棒は窓の外だけをまっすぐ見ていた。

「……二人とも自殺しちまうんだよな。そりゃまたドラマなぞったみたいな遺書とか書いてたりしてよ。　『息子の不徳の致すところはそもそも私たちが云々』とかなんとかーって。理由はともかく、そういうやり方しか浮かばなかった息子が馬鹿なだけなのによ」

　ふとこちらの視線に気がつくと、どいつもこいつも救いようのない馬鹿だよなぁ、と笑った。
　その顔を見て、ようやく何かが腑に落ちた。

　これ、この話は。
「……その男はこれから、……それからどうなるの？」
　訊かずにはいられなかった。
　口を開いた男の笑顔は、淀みなかった。
「……さァ？ この話の終わりは俺も知らない。そのまま変な道突っ走るんじゃねえのかな」
　そう、となんとか返事をやった。
　なにか言わなきゃ、と思った。なんと言えばいいのかわからなかったが、何か告げねばと思った。

　……と、その時 ジリリリリリリと耳を劈く音が響いた。

「……警報だっ」
「やべぇ、バレたか？」
　まァいいか、もう盗るもんは盗ったし、と呟く声だけ聞こえた。
　見上げると男の瞳はさきほどまでの雰囲気は消え、来た時のような何を考えているのかわからぬ目をしていた。

「あ、あの、……き、気をつけて？」

……って言うのも変だけど、と続けながら困って俯くと、
「おう、お前も達者でなー」
と、男は腰掛けていたベッドから立つと、一度だけこちらの頭を撫ぜた。

　慣れぬ行動をとられ、一瞬息が止まるかと思う。
　こちらのことなど気にもとめず、落ち着いた動作で膨らんだ白い袋を担ぎ直した。
　そして来た時と同じように窓にさっさと足を掛け、窓枠に左手を掛けて体を支えるとモミの木に手を伸ばした。きっと数時間前もこの木を伝って来たのだろうなと思った。
　うだうだと脳内を言葉が駆け巡るが、何を言葉にしたらいいかわからない。

「……ねぇ！」

　あ？と振り向いた。
　口篭る、どうしようかと悩んだが、意を決し吐き出してしまおうと思った。
「……話の続き考えた！
　あのね、たぶんその人１年以内に今の変な仕事やめてどこかの社員になるよ。それでどうしようかな、ええと、４、５年後くらいに運命の出会いをして若いお嫁さん貰うの。そのあと、３人くらい子供ができて子煩悩なパパになって、奥さんと幸せな老後を送る！」

　視界の先で窓枠に手を掛けたまま目を丸くしていたので、無理やり笑って見せて、ほら、ハッピーエンドでおしまいだよ、と胸を張って述べてやった。
「……じゃあ、俺も誰かの話の続き考えてやるよ」

　え。

「……そうだな。臓器提供のさ、ドナーっていうのか？ それが何年後かに現れる。手術は成功、女の子は健康体になって退院して、夢だった高校進学を果たす。で、５年後くらいにそれなりに普通なヤツと出会って結婚して、誰より幸せになる。それで、子供の頃には考えられないくらい女の子は長生きして、その街で一番長寿な婆さんになる」

　唖然と目を瞬かせていたこちらを見やり、サンタの格好をした男は笑った。
「ハッピーエンドだ、おしまい」

　廊下をばたばたと走る足音が近づいてくる。
　手首に巻かれたガムテープを見つめ、助けなんか来なくていいよと思う。
「……そうだよね、そうかもしれないよね」
「……ん、そうならないとも言い切れないな」

　頷いた。視界がぼやぼやしていた。
　煩い足音が聞こえてきたのか、男は少し焦り、じゃあな、と一言述べた。似合わぬ老人の格好をした男が、背を向けるのをぼんやりとしたまま見送る。でもどうにも我慢ができなくなり、どうにかもう一度だけ口を開いた。

「 めりくり！ ……またね、 」

　振り返った。
　一瞬虚を突かれたような顔をし、
「めりくりってあれかなんでもかんでも略してんじゃねーよ意味わかんねーだろうが」
　……と、足音に焦っているのか早口に言って、だが手を上げてちゃんと応じ、
笑った。

「 メリークリスマス、……もう二度と来るかよ 面倒くせ！ 」

Christmas

～♪We wish you a Merry Christmas,
We wish you a Merry Christmas,
We wish you a Merry Christmas,
And a Happy New Year.

よい知らせを持って来ましたよ、
あなたと、家族に、クリスマスおめでとう、
そして、

そして、新年おめでとう！